

ハンセン病の同胞たち

① キブシヤマのころ

1

私が、兄弟たちとはじめて出会いましたのは、昭和一七（一九四二）、八（四三）年ころ愛知県三河地方の「キブシヤマ」という所に住んでいたときでした。太平洋戦争のまっただ中で、私はまもなく小学生という頃でした。

「キブシヤマ」は、美濃三河高原の西部にあたりまして、焼物に用いる木節キブシ粘土を掘り出していた粘土ヤマの通称で、住人たちが勝手につけた土地名であります。

正しくは、愛知県西加茂郡さなげ猿投村大字御船字山ノ神でした。現在は、県は変わりませんが、西加

茂郡は豊田市——その頃は御船の山から眺めて煙突が三本見えるだけのトヨタという小さな工場の町でした——に併吞されて消え、以下は猿投町大字御船字山ノ神となっております。

「キブシヤマ」には、百人たらずの朝鮮人——半島人もかもしれません——がいました。ヤマの大人たちは顔が合えば「我々半島人は……」と口走っていましたし、そのように呼ばれることを願い、名誉ともしているようでした。

正しい土地名は「山ノ神」でしたが、日本の言葉はカケラほども持たずに渡来し工事場を巡りながら土方仕事をしている人々には、仕事の現場であります木節粘土を掘る山「キブシヤマ」の方が具体的に通じやすかったのだらうと思います。

大人にも子どもにも「キブシヤマ」でありました。誰一人として「山ノ神」とは言いませんでした。

豎坑や斜坑もありましたが、集落がふくらみ採掘の規模が大きくなるに従って、露天掘りが主となりました。私の記憶にある豎坑や斜坑は、すでに廃坑となって闇をたたえた黒い坑口としてしかありません。

露天掘りの現場をキブシヤマの人々は「ハネヤマ」と言っていました。上土をハネ除くこと「撥山・剝山」の意かと思えます。これもキブシヤマの人々の勝手な造語のようです。

ハネヤマは子どもたちが近づいてはならない神聖な領域でした。大人の中でも飛びきり力の強い男だけが働きに行けるヤマでした。父親や兄がハネヤマに行っている家の子は自慢でした。

私たち子どもは野や山で遊び呆けては、ときどき盗み見するように遠くから眺めることもありました。禁を犯すようで罪まじりの気分でしたが、大いなる憧れの世界で止みがたいものでした。

小高い山から見る憧れのハネヤマは、赫土の巨大なスリパチで真赤でした。遙かな底の方は真黒でキブシ粘土が顔を見せていました。尊敬するあの強くて大きな「アボジ父」は、黒いちいさな点々となって赫土の急斜面にへばりつくようにしてうごめいていました。それは不意に足元が崩れて奈落に落ちてゆくような心細い風景でした。

「オモニ母」たちは一人残らず「センコバ選砒場」で働いていました。私の母もセンコバに通っていました。乳飲み子や幼子をもつ母親たちは背負ったり、キブシを運ぶ竹箕〔鉱物の選別・運搬に使う竹製の道具〕に入れてセンコバの隅に置いていました。私もセンコバの隅の竹箕の中でオモニたちの働きを眺めながら白い粘土ぼこりを吸って大きくなりました。

父母の出身地は朝鮮国黄海北道であります。母は日本に渡って来るまでに七人の子を成しましたが、うち五人を失くしました。一人だけは七歳まで生きましたが他は総て一、二歳で死んでしまったそうです。軽いかぜをひいても持ちこたえられず死なしてしまつたと、後日よく嘆きました。

日本国に渡って来て二人の子を生みました。姉と私です。私は母が四三歳のときのどん尻です。生地は愛知県知多郡大府町です。現在は大府市となっております。日本国での二人はありがたいことに育ちました。工事場や粘土掘りのヤマを渡る、楽ではない生活だったのですが、とにもかくに

も食えたのです。

大府からキブシヤマに移ったのは、私が二歳ころでした。確かな理由は分かりませんが女の仕事、センコバがあつたからではないかと思えます。父は五〇歳を少し越したぐらいでしたが、もともと丈夫な体ではありませんでしたから、当時の恐ろしいまでに体力を要求する「ドカタⅡ土方」仕事には堪えられなかつたようです。ましてドカタの中でも特別に強い男だけが働けるハネヤマには行けませんでした。ハネヤマは強い力と同時に敏捷さも要求しておりました。赫土の急斜面で風と崩落の危険にさらされながらツルハシとスコップだけで山を撥ね除けるのですから、若くなくてはけませんでした。

子ども二人の口塞ぎは、母のセンコバでの賃稼ぎに頼り、自分は口減らしのような旅に出ています。

キブシヤマは貧しい集落でした。困窮のはてに女・子どもまでが、粘土があるだけの異国の荒れヤマに生き延びる糧を求めて流れ寄った人々の集まりでした。

風景もふさわしく無残でした。人間が住むに必要なものは、何もありませんでした。見渡す限りに地肌をむき出しにした赫土の禿山で、明るい陽の下では見るのも恥ずかしいほどでした。

周辺一帯は古くからの焼物の地で、西方二〇キロほどには瀬戸の町があり、北側の美濃の地にも数多くの焼物の町がありました。赤松が多かったキブシヤマは一本残らず燃料用に切り取られてし



まいました。地下には大量の粘土層がありましたので、これを探るのにハネヤマで山をひっくり返してしまったのですから、草木は根こそぎになりました。

至る所がハネヤマ跡の巨大なスリバチや谷でした。中には白濁の粘土水を溜めて底なしの池となっている危険なハネヤマ跡もありました。

しかし、草や木の再生が全く途絶えてしまったわけではありませんでした。芒の強さは特別で、ハネヤマの最中でも根づきましたし、跡地などはもう芒の天下でした。樹木はそう簡単にはゆきませんようで、子どもの丈を少し越えるくらいの雑木が、あちらに一本こちらに一本と芒に遠慮しながら立っていました。

私たち人間も似たようなものでした。芒の原っぱやハネヤマ跡のすき間をぬうようにして、掘立てバラックが七、八棟、あちらに一棟こちらに一棟と脈絡もなく建っておりました。バラックは周りを粗板で釘づけにしただけの四軒の棟割りでした。

天井はありませんで、出入口に片開きの板戸と部屋の奥に押上げの小窓が一つありました。これと同じく松の粗板を釘づけにしてありました。明かりとりの工夫が全くされておらず、日中でも室内は薄暗い長屋でした。

水道はおろか井戸も下水もありませんでした。便所は集落の外れの芒原に共同が一つしつらえてありました。地面に四角の大きな穴を掘り厚手の板を二枚渡して踏み板とし、囲いには蓆むしろをたらしていました。屋根はありませんでした。雨期などはあつというまに雨水のプールになってしまおう

ですが、粘土質の赫土ですので退ひきが悪くて使用不可能となってしまう、他に適当な穴を掘って移動しました。電気など入るはずありませんから、夜は真暗で星明かりを頼りに、手探り足探りで踏板を求めました。子どもなど落ちたら最後でした。

大人たちは共同の設計段階では子どもなど念頭になかったのか、あるいは共同に足を踏み入れるのはおこがましいと考えていたのかもしれない。しかし、そんな恐ろしい共同は子どもたちには無用でした。キブシヤマでは小さな子どもはどこでも勝手でしたし、小学校に行っている大きい子どもは学校で用を足したり、帰り途やお気に入りの場所ですましていましたから不自由はしませんでした。

キブシヤマは水無しのヤマでした。井戸は掘ってみたようですが、どこを掘っても水はありませんでした。ハネヤマで山を削り大地をひっくり返して水脈を寸断にしたせいだと思います。ハネヤマ跡の巨大なスリバチ群の中には、水を溜めて池と化しているものもありましたが、粘土まじりで白濁の水ですから飲料にはもちろん、洗い水としても使えませんでした。それに水辺はぬかるんで滑りますので近づくのは大変に危険でした。

父さんたちは雨の日以外はハネヤマでしたし、母さんたちは、雨の日でもセンコバに行っていましたから台所の水と燃料は子どもたちの仕事で、責務と聞いていいほどでした。

燃料を「タキモン」といっていましたが、これは野山を歩いて松の落葉や雑木の枯れた小枝を拾

い集めれば足りましたし、ついでに食べられる実のなる木や草や花を発見したり教えあったりして、天気さえ良ければタキモン拾いは楽しいものでした。

水にはほとほと困りました。キブシヤマには一滴の湧き水も糸ほどの流れもありませんでしたから、子どもたちは水を探してヤマのふもとや、よりヤマ奥を右往左往しておりました。湧き水があれば囲りを掘り広げ、流れがあれば石を運んで堰止めて、水汲み場にしておりました。

「パガチニ冬瓜を二ツ割りにして〔中身をくりぬき〕表皮を利用した器」ですくい上げてはバケツに移すのですが、急いだり油断して少しでも荒くしますと底の砂が舞い上って使いものにならない水のカメに満たしては、母を怒らせたり嘆かせたことも再三でした。

私の家にかぎったことではないと思いますが、生活ぶりは、その日その日を食べてさえいければ幸せでした。子どもは姉と私の二人という口数の少ない家庭でしたが、母が通っているセンコバの稼ぎだけでは日々の糧を確保するのもままにならなかったようで、米櫃の底をさらう音がガリガリ鳴って、明日の心配をする日の方が多い暮らしでした。

米櫃といっても古いブリキの一斗缶ですが、それに白い米が満たされる幸せな風景を見ることは滅多にありませんでした。

菓子や果物は論外でしたし、お金があつたにしても手に入れるのは困難な時代でした。子どもたちは本能に導かれるように野山を走り回って、甘い実や酸っぱい葉っぱを提供してくれる草木を探しだし、おやつの調達をしておりました。

それら狩場の中に芒の野原がありました。ハネヤマの跡は芒の天下でしたが野茨も負けていませんでしたから量は無限といってもいいくらいでした。芒は収穫の期間もながくて、年中無休でした。初夏のころには茎の中に納まわれている穂を引き抜いて食べます。「ツンバナニつばな」といっておりましたが、柔らかな草の香りと少々甘味もあり結構おいしいものでした。そして秋ぐちからは根っこです。太いのを掘り出すのは苦労ですが、赫土の臭いまじりにしてもカリカリして甘味も水気も穂よりは数段上等でした。

秋のはじめころになりますと芒はいっせいに穂を出しはじめて、子どもの丈をはるかに越してしまします。ツンバナの季節は終わり、根っこ掘りが専門になります。この頃は野茨の実が真赤に熟れて大忙しです。夢中になって顔や手足にケガをしたり——秋口の芒の葉や野茨のトゲは刃物のように切れます——深入りして方向を失い、帰りが遅くなって親たちを心配させることがたびたびありました。

学校に行っている子どもたちは帰りに入り込むのですから、日暮れ近くまで芒原ですごしてしまい、暗くなって家に帰り着くことが多いようでした。

2

秋も深まり、日暮れはさらに早くなりました。そんな頃、誰ともなく芒の原っぱには「キモトリ